

**令和5年度8020公募研究事業  
研究報告書抄録（採択番号 23-1-01）**

研究課題：後期高齢者歯科健診データを用いた口腔の健康状態と認知症との  
関連

研究者名：岩井浩明、東 哲司、米永崇利、笹井保之、友藤孝明

所 属：朝日大学歯学部口腔感染医療学講座社会口腔保健学分野

**【目的】**

認知症は、高齢期における大きな健康問題の1つである。認知症の根本的な治療法は、まだ確立されていない。そこで、認知症と関連する要因を様々な角度から探索することは、認知症の予防対策を立てる上で有用となる。近年の研究から、口腔の健康と認知症との間に横断的な関連があることが分かってきている。しかし、高齢者における口腔の健康と認知症との縦断的な関連については未だ情報が少ない。そこで本研究は、岐阜県の後期高齢者を対象に2年間の縦断研究を実施し、口腔機能と認知症発症との関連を検討した。

**【方法】**

岐阜県の後期高齢者歯科健診を受診した者のうち、認知症と診断されていない7384名を2年間追跡調査した。口腔機能については、咀嚼状態、舌・口唇機能、および嚥下機能を調査した。咀嚼状態は自記式質問票、舌・口唇機能はオーラルディアドコキネシス検査、嚥下機能は反復唾液嚥下検査を用いて評価した。いずれの口腔機能も正常もしくは要注意のいずれかに判定された。また、全身疾患の有無は、国保データベースシステムのデータを用いた。

**【結果】**

2年後、415名（6%）の後期高齢者が新たに認知症と診断された。認知症発症の有無で比較したところ、性別、年齢、高血圧の有無、定期的な歯科受診の有無、1日2回以上のブラッシング習慣の有無、20歯以上の現在歯数の有無、齲蝕歯の有無、舌・口唇機能および嚥下機能で有意差を認めた。これらの要因を調整した結果、2年後の認知症発症の有無は、性別（女性；オッズ比〔OR〕=1.386、95%信頼区間〔CI〕=1.117-1.719）、年齢（OR=1.078、95%CI=1.056-1.101）、定期的な歯科受診（なし；OR=1.452、95%CI, 1.180-1.788）、ブラッシング習慣（1日2回未満；OR=1.510、95%CI=1.194-1.911）、齲蝕歯（あり；OR=1.328、95%CI=1.071-1.648）、および嚥下機能（要注意；OR=1.484、95%CI=1.135-1.939）と関連していた。一方、2年後の認知症発症と咀嚼機能、舌・口唇機能との間には有意な関連を認めなかった。

**【結論】**

本研究の結果は、後期高齢者の嚥下機能が要注意と判定されることは、2年後の認知症の発症と関連することを示唆している。